

三 次の文章を読んで、問いに答えよ。

おなじ頃、越の方へ修行し侍りしに、甲斐の白根には雪つもり、浅間の岳には煙のみ心細う立ち上る有様、信濃のほやの薄に雪散りて、下葉は色の野辺のおも、思ひ増し行くまの渡りのまろき橋、つらら結ばぬ谷川の水の、流れ過ぎぬる果てを知らずる人もなき、険しき山路の峰の岩木の繁きがもと、木曾の懸け橋踏みみれば、生きてこの世の思ひ出し、死して後の世のかこつけとせむとまで覚え侍りき。あづま路こそは面白き所と聞き置きもし思ひ侍りしに、物の数にもあらざりけり。野辺を過ぐるには、武蔵野のしげれる中に入りしよりも、むらむら咲ける草花、なかなか心をいたましめき。山路に入る折は、宇津の山、鶯の細道通ふよりも、すみわたりてぞ覚えし。「佐野の野辺には、袖払ふべき陰もなし」とながめ、「信濃なるほやの薄の風もあらば」とながめけむ、いとど思ひ合はせられて、涙もそぞろに落ち侍りにき。

かくて、やうやく過ぎ行くに、かこの渡りに、今少し行き着かたで、山の際にて山伏一人、男一人侍り。この男あきれたるさま侍り。事の見過ごしがたさに、「いかに、何事にか」と言ふに、「ただ」とばかりうち言ひて、語る事も侍らざりしを、「なじかは、何事なりとも苦しく侍るべき。すべてうしろめたき事は、ふつに侍るまじきぞ」と強ひて聞こえしかば、この山伏言ふやう、「そのことに侍り。我、高筈かけ、斗敷を行する身に侍り。この殿は、いつくの人にかいますらむ。ただ、道のほど、しばらく行き連れ侍りつるばかりに侍り。しかあるほどに、この人に重敵の侍りて、行く先にも待つなり。すでに方便つくるなれば、帰るべしとても、助かるべきに侍らねば、供に侍りつる男どもも、命に勝る事なしとて、あそこここに落ち散りて、ただ一人せむ方もなくておはしつるが、いとほしくてなむ過ぎやり侍らず。いかがしてこの殿の助かり給ふべきわざをせむと思へども、かなはず。日影もかたぶけば、羊の歩みの近づく心地して、そばにいてど悲しく侍り」とて、涙もせきあへねば、この男も「けふ一日の路ばかりのなじみに、これほどまで思ひ給ふらむ事の忘れがたく侍り。いかなる世にか報じ参らせむ」とて泣くめり。事ざまあはれなるままに、我も **A** て、聞こゆる事もなく、三人泣きあたり。

さてもあるべき事に侍らねば、この山伏の筈の中に、この人を隠し入れて、二人うちともなひて道を過ぎ侍るに、太刀佩き弓持たる男ども十余人集まりて、「過ぎつる方に、しかじかの男や侍りつる」と尋ね侍りしに、この山伏、いささかも騒がず、「さる人侍りきが、この渡りをせむとありつるが、敵の待つとかや告ぐる人侍りとて、また越後の国へとてこそ赴き侍り **B** と言ふを聞き、「こは、うち逃がしぬ。いざ追はむ」とて、馬に乗り鞭をあてて、馳せ過ぎにけり。さて、かれはからくして命を助かりて、越中の国に着き侍りぬ。さて、この山伏をやうやうにとどめしかど、さらに聞き入れ侍らず、過ぎ去り侍りぬ。我をも去りがたくとどめ聞こえ侍りつれども、もつばら助けける人すらとどまらぬをやと思ひしかば、もてはなれける返事して、過ぎ侍りぬ。

あはれ貴かりける山伏の心かな。年ごろ従へる奴婢すら離れ行くに、続きもなき人のそぞろに嘆きて、我が高筈に隠し置き、敵の前を過ぎけむ、かへすがへす有り難くぞ侍る。ただ道のほとりに行き合ひ侍れば、言葉のつての情はするとも、たれかくばかりは侍るべき。観世音の因位の大悲は、かくや深くおはしましけむ。人の嘆きを我が嘆きとし、他のよろこびを自のよろこびと思へるこそは、まことの仏法に侍るなれ。

〔撰集抄〕による

注 筈 修行者などの使う背負い箱。

斗敷 諸国をめぐり修行すること。

大悲 衆生を救う大いなる慈悲心。

問1 傍線①の「より」と同じ用法のものを、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 時の間の煙ともなりなむとぞ、うち見るより思はるる。(徒然草)
- 2 同じほど、それより下藪の更衣たちはまして安からず。(源氏物語)
- 3 東海道は遠江より東はまゐらず、西は皆まゐりたり。(平家物語)
- 4 百薬の長とはいへど、万の病は酒よりこそ起これ。(徒然草)
- 5 女房五人十人うちつれ通れども、一目よりほか見ざりける。(物くさ太郎)

問2 傍線⑦の「涙もそぞろに落ち侍りにき」の理由として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 先人達の訪れた歌枕の地を順に巡って、さらに文学的感動の気持ちが高まったため
- 2 現在の旅の心情表現が過去の文人達の文学的営みに大きく負うていると感じたため
- 3 今の旅の感動が過去の詩歌に込められた心境と共鳴するところがあると感じたため
- 4 過去の文学作品を味読しながらの旅が自分の旅の感動に新味を加えると感じたため
- 5 自分の旅は過去の文学の優れた旅情を越える域に達しないだろうとの挫折感のため

問3 傍線⑧の「あきれたるさま」、⑨の「方便つくるなれば」を、それぞれ一〇字程度で現代語訳せよ。

問4 A に入れるのに、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 袖を連ね 2 袖に時雨れ 3 袖を振り 4 袖を片敷き 5 袖を絞り

問5 B に入れるのに、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 つる 2 けめ 3 しか 4 ぬる 5 けれ

問6 傍線⑤の「もつばら助けける人すらとどまらぬをや」の意味として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 助けた人までも行くと行かないから、私も居る理由はないだろう
- 2 助けた人がここを去ると言うのだから、とても止められないだろう
- 3 助けられた人すら行くと行かないけれど、それで良いのだろうか
- 4 まさに助けた人が去るのだから、私も行く必要があるだろうか
- 5 助けられた人自体が居残らなくて良いのか、そんなはずはない

問7 本文の内容に合うものを、次のなかから二つ選び、その番号で答えよ。

- 1 語り手が東路・信濃路を経て越路に入ると、そこに宇津の山、はやの薄などの感動的な風景が見出せた。

- 2 語り手は、事情ありげな男に出会い、努めてその訳を聞くと、傍らの山伏が詳しく前後の説明をした。
- 3 山伏は、修行の道中に男に出会い、その懇願により助ける手段を一緒に考えて、その難を逃れさせた。
- 4 前途に敵が待ち構え、奴婢に逃げられた男は、山伏と語り手との親身な温情に深く感謝の念を抱いた。
- 5 敵の待ち伏せに出くわすや否や、山伏は慌てず笈に男を隠し、男は越後に向かったと敵をあざむいた。
- 6 男を思いやる山伏と語り手の篤い手助けが、男を感動させ、仏法の奥深さを感じさせる結果を導いた。

問8 本文の第一段落のような文章の特徴を示す用語として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 道行文 2 俳文 3 駢儷文 4 消息文 5 候文